腹腔鏡下手術と専門医研修に注力する

医療法人鉄蕉会 亀田総合病院

千葉県鴨川市 医療法人鉄蕉会 亀田総合病院 泌尿器科部長・内視鏡下手術センター長

安倍 弘和 先生

亀田総合病院は千葉県房総半島の南端に位置する鴨川市にあり、南房総地域の基幹病院です。医療法人鉄蕉会グループ（亀田メディカルセンター）の中核施設として高度急性期医療を提供し、地元だけでなく全国から患者さんが訪れます。同院泌尿器科は部長の安倍弘和先生を中心にあらゆる泌尿器科疾患の診断・治療に対応し、腹腔鏡下手術をはじめとする手術や専門医研修などに力を入れています。

あらゆる泌尿器科疾患に対応する

亀田総合病院泌尿器科は関東地方をはじめ全国から患者さんが訪れますが、南房総地域の高齢者が数多く受診しています。地域には泌尿器科を専門とする医療機関が少ないため、1時間以上かけて外来通院している患者さんもいるそうです。2014年に同科部長として招かれた安倍先生は、「当科は地域の最後の砦となるので患者さんを断ることはなく、患者さんの希望に沿って治療を行っています。100歳の患者さんの手術を行ったこともあります」と話します。

手掛ける手術は、良性疾患では前立腺肥大症、尿管結石、尿失禁、骨盤臓器脱、副腎腫瘍、バスキュラーアクセス、腎移植など。悪性腫瘍では前立腺がん、膀胱がん、腎盂尿管がん、精巣腫瘍などに対応しています。腫瘍外科とチームを組んで後腹膜悪性腫瘍に対する外科治療も実施しています。「当院はどの科も医師が十分にそろっているため、科を超えた連携で治療を行うことができるのが大きな特色です」。そう話す安倍先生は腹腔鏡下手術のスペシャリストで、静岡県の病院に勤務していた頃、大学の医師から技術を学び、フランスの腹腔鏡トレーニング施設（IRCAD）での経験もあります。そして、2011～2012年に亀田総合病院ウロギネ・女性排尿機能センターで腹腔鏡下仙骨腟固定術（LSC）の指導を行ったことが縁で部長に就任しました。「当時の泌尿器科の先生がとてもきれいな小開腹手術を行っていらっしゃったので、腹腔鏡下手術を同じようなレベルに上げることが一つの目標となりました」と振り返ります。

腹腔鏡下手術は痛みや出血が少ない低侵襲の治療です。「患者さんにはプラスが多くあり、手術後3時間目から歩いたり食事をとったりできます。入院日数も腹腔鏡下仙骨腟固定術は2泊3日、腹腔鏡下前立腺全摘除術は術後7～8日と短くてすみます」。安倍先生が就任して以来、同科での腹腔鏡下手術は、例えば前立腺全摘除術が2014年の25件から2019年の102件へ、膀胱全摘除術がそれぞれ5件から15件へと着実に件数を伸ばしています。「腹腔鏡下手術にこれからも力を注ぐことはもちろん、2022年にはロボット支援手術を導入予定で、その準備を進めているところです。また、LSCの導入支援をこれまで全国の約50施設で行ってきましたが、子宮温存や子宮全摘など独自の技術も取り入れて普及に力を注ぐ予定です」。

■診察室。患者さんとコミュニケーションを十分に取って治療方針を決めます。

■腹腔鏡下手術を中心に、2020年は約1,600件の手術実績を上げています。基本的に外来担当医が手術を行うそうです。

泌尿器科の専門医研修に力を注ぐ

亀田総合病院は医師の卒後臨床研修や専門医研修に力を入れており、泌尿器科も専門医研修プログラムを用意しています。腹腔鏡下手術、尿路結石治療、前立腺肥大症治療は全国トップレベルの指導体制にあるといいます。東京や大阪といった大都市で求められる医療を学んだり、地方の中小規模施設で地域医療に携わったりして、治療技術だけでなく規模や地域差による病院の役割を学ぶことができます。現在、専門医研修を受けている1～4年目の専攻医10名が在籍。1年目の募集定員は2名ですが、3名を受け入れられる年もあります。専攻医には積極性を磨き、納得のいくレベルに達するまでがんばってほしいと安倍先生は考えています。「外来診療、入院診療を1年目から受け持ち、自分の責任でできる仕事を増やしていくことで、研修プログラムの修了時にはほとんどの手術が行えるようになっています。毎年、専攻医のフルマッチが続き、医局は若手医師の活気で満ちあふれています」。

また、主に都内の有名病院の若手医師が集まり、症例についてディスカッションする場となっている東京泌尿器研修協議会に亀田総合病院は加わっています。同協議会に参加することは若手医師同士が切磋琢磨する良い機会となっているそうです。安倍先生に今後の抱負を尋ねると、「腹腔鏡下前立腺がん手術後の尿失禁は少なく、もともと在籍していた若手医師も腹腔鏡下手術を積極的に取り入れるようになりました。最近、医原性尿路損傷の診断・治療で悩んで受診するケースが増えており、当科での手術技術を多くの方に知っていただく機会を設けたいと考えています。若手医師が泌尿器科医として熱い思いを消さずに持ち続けてもらえるような取り組みを一つ一つ重ねていきたいですね」という答えが返ってきました。そして、同科で研修を終えた若手医師が全国各地で活躍する日を楽しみにしているそうです。

■泌尿器科の医師は出身大学も別々で、それぞれが自立的に積極性を発揮して治療に当たっています。

■安倍先生は、「若手医師は患者さんの期待に応えられるように日々鍛錬してほしいと思います」と語ります。

（2021年8月取材）